

ことばの学習教材としての絵本における適切な書体の研究

齋藤 岳人(東京都立大学 人文科学研究科 博士後期課程)

研究の背景

近年、絵本が子どもの言語的発達に有用であることが報告され、積極的な活用方法(例:ことばの学習用の絵本)が検討されている。絵本では、文字の習得が未完了な子どものために、文字の認識がしやすい単純なデザインや可愛い(丸みのある)デザインの書体がこれまで使用されてきた。しかし、これらの書体は成人にとって読みにくい書体であり、子どもにとっても適切ではない可能性は排除できない。そこで、本研究は、絵本で使用される書体が本当に子どもにとって適切であるかを検討するために、未就学児を対象に文字の弁別のしやすさと主観的評価から検討した。

研究方法

二つの段階に分けて研究を行った。まず、絵本コーパスを使って、実際の絵本で使用されている書体を数えあげ、使用頻度の高い書体を検討した(研究1)。次に、研究1で示された絵本でよく使用される書体と一般的な印刷物で 사용되는書体を使って、未就学児(4から6歳)に対して文字の弁別課題(異同判断課題)と書体の形態への評定課題を行った(研究2)。異同判断課題は、様々なひらがな文字のペア(例:#あ#お#, #そ#う#, #お#お#)について同じ文字か異なる文字かを素早く判断するものだった。評定課題は、異なる書体で表されたいくつかの無意味な文字列(例:あきちぬは、うたねのひ)について好ましさと読みやすさを主観的に評価(1から4を☆の数で報告)するものだった。

結果

研究1で選定した絵本で使用頻度の高い書体(丸ゴシック、ポップ体)と一般的な印刷物の書体(ゴシック体、明朝体、教科書体)を使って、異同判断課題の結果(エラー率と正答時の反応時間)と主観的評価を書体ごとに比較した。その結果、異同判断課題では、エラー率には差はなく、書体に関わらず安定して異同判断ができていたものの、反応時間ではゴシック体がポップ体以外の書体(丸ゴシック、明朝体、教科書体)より有意に早く判断が出来ていた(図1)。また、文字のストローク(線)の幅で書体を分類し、反応時間を比較したところ、ストロークの幅が太く、均一な書体(丸ゴシック、ポップ体、ゴシック体)の方がストロークの幅が細く、均一でない書体よりも有意に早く判断が出来ていた(図2)。評定課題では、絵本で使用頻度の高い書体の方が一般的な印刷物の書体よりも読みやすいと判断される傾向が示された。

これらの結果は、子どもにとって絵本でよく使用されている書体と同じ形態的特徴を持つ書体の方が文字の弁別が容易で、主観的にも読みやすいと判断される一方で、丸みが強調された書体では文字が見分けにくくなる可能性を示唆する。

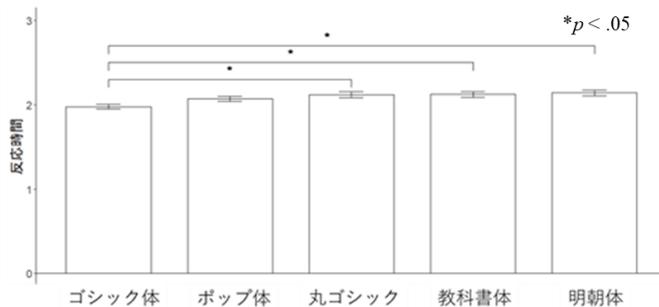


図1 書体ごとの反応時間の比較

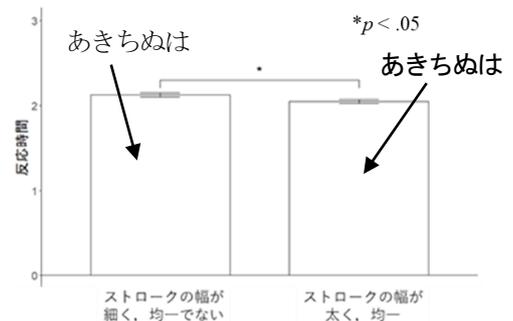


図2 ストロークの違いからの比較

研究の成果と今後の課題

本研究の結果から、絵本でよく使用される書体が子どもの文字の学習において有用である可能性が示された。また、子どもにとってよく目にしている形態の書体(絵本の書体)が見慣れない形態の書体(一般的な印刷物の書体)よりも文字の弁別が容易で、主観的にも読みやすい書体であったことは、子どもが絵本での文字の接触履歴をもとに文字の形態の一般的なイメージを形成している可能性を示唆する。今後は、本研究で用いた課題を成人に対しても実施し、その結果を比較することで子どもと成人で読みやすい書体が本当に異なるかを再度検討する必要がある。